

重宝記の源流

——『家内重宝記』と『昼夜重宝記』——

長 友 千代治

一 『家内重宝記』

近世の大阪を代表する出版物の一つに実用書がある。その中の一つが重宝記であることは、元禄十五（一七〇二）刊都の錦著『元禄大平記』の記事を証拠に繰り返し説かれてきていることである。

それは、京都の本屋と大阪の本屋の会話として、京都の本屋が現在は堅い書物は引っこめておいて、商売の勝手には好色本か重宝記の類がましじやと言うと、大阪の本屋もおっしゃればそうじや、すでに大阪において家内重宝記が出来はじめてから、その類は棟に充ち、牛に汗するほどである。しかしこの頃は、はやくも重宝記も末になり、万宝に移り、諺解が古くなると、詳解にあらたまり、大成がすたと、

集成が起るとある（巻一の二）。即ち、本屋商売で都合よく売れるのは好色本か重宝記の類といい、大阪で家内重宝記が出版されてからは、重宝記の類が汗牛充棟の状況になったというのである。

それでは、最初に、重宝記の初発『家内重宝記』について概観してみることにする。管見の範囲では、『家内重宝記』には、初版の森田庄太郎版と後版の浅野弥兵衛版とがある。森田庄太郎版は東京都立中央図書館特別買上本（二二五七）、神戸女子大学図書館森修文庫本、東京家政学院大学図書館本、東京国立博物館本などがある。浅野弥兵衛版は石川了氏蔵である。

①初版森田庄太郎版の書誌を、東京都立中央図書館特別買上本（二二五七）で記してみると、次のようになる。

○外題 欠（所見本いずれも欠）。

○目録題 「家内重宝記」。

○大きさ 縦六・九糧横一五・五糧。

○匡郭 縦五・七糧横一四・一糧。

○丁数 百三十八丁。

○刊記 元禄二己巳年／二月十六日

大阪北御堂前

書林 森田庄太郎刊板

②後版の浅野弥兵衛版についてもほぼ同様であるが、刊記は次のように改められている。

○刊記 元禄二己巳年／二月十六日

高麗橋壹丁目藤屋

浅野 彌 兵 衛

さて、『家内重宝記』の内容については、『東京家政学院大学図書館報』第30号に目録を中心に紹介されているが、そこでは版心柱記と丁数の関係が明らかにならないので、そのことと合わせて、詳しく内容を見てみることにしたい。版心柱記は高さを変えて、以下に標目するようになっている。

○目録二丁分には版心柱記はない。

○服忌（三〜九才）

「御改正服忌令」。

「貞享三丙寅年四月日民間所ニ 触下給一之服忌令無二一字之差謬一伝写而以令開板者也／右之赴 尤奥書共以二前板

ありを 有レ之令ニ重板一者也」とあり、「新旧相違の例」も記している。「服忌令」を載せることは、後の『昼夜重宝記』も同じである。

○八卦（九ウ〜四十ウ）

「天門八卦抄」。

本文には「本番之事」、「人生上中下元之事」、「順と逆の事」、「八卦のかぞへやうの事」、「本卦の事」、「六十図を見ず年ばかりを聞て十干を知事」、「六十甲子納音五姓を知事生れ姓の事なり」、「弘法大師一枚八卦四目録」、「卦数の次第を可知事」、「九曜のくりやう」、などの報告がある。

○八卦（四十ウ〜宝曆五十四ウ）

「日用雑書」。

目録には、「子の日より亥日まで其日の下にて毎月一切のよしあしをしるなり」、「一日より三十日まで其日の下にて毎月一切のよしあしをしる事」とある。

○宝曆（五十四ウ〜六十七ウ）

「万病食物宜禁の事」。

目録には、「万病食物よしあしの事」とあり、「中風より婦人小児の諸病に至るまで不残記又并くひ合きんもつの事」と説明している。本文には、「婦人禁食物好物のおほへ」、「小児禁好のぶん」、「食物くひあはせ禁物」の項目だてがある。

○妙薬（六十八オ〜七十九ウ）

「諸病妙薬の方」。

目録には、「万病の妙薬」とあり、「医家のひみつ即妙の名方を不
残しする」と説明する。

○染物（八十オ〜八十六ウ）

「万しみ物のおとしやう」。

目録には、万あぶら、しみ、しぶ、とりもち、おはぐる、うるし
の落し様、もりあめの洗い様を出している。本文には、「絹のね
りやう」、「万染物の仕やう」の項目だてがあるが、これは目録で
は独立項目にしている。前者には、きぬ、つむぎ、すがいとの小
見出し、後者には、小こんぞめ、しやれがき、くろちや、ござみ
ぞめ、ねずみ色、など十五種の小見出しがある。

○八算（八十七オ〜九十四ウ）

「算数の部」。

目録には、「八算見一の割」とあり、「九のこゑ」、「八算のこゑ
并二わりやう」、「見一のこゑ并二わりやう」の小見出しがある。

○日本（九十五オ〜料理百廿二オ）

「日本国道中記」。

本文には、東海道、伊勢道、木曾道、中山道、北陸道、江戸より
仙台、仙台より盛岡、江戸より鶴岡、江戸より日光山など、また
京より紀州若山、京より有馬、京より奈良・泊瀬・吉野などの宿
場と里程等のほか、その別れ道も記す。大坂より西国船路、大坂
より江戸迄海上の里程、難所なども記している。

○料理（百廿二ウ〜百卅八終）

「料理献立の部」。

本文には、「十二月汁のぶん」、「雑汁のぶん」、「なますの部十二
ヶ月」、「にものゝ部」、「さしみの部」、「あへものゝ部」、「あえま
ぜの部」、「精進すあえの部」、「吸ものゝ部」、「肴の類魚鳥精進」、
「たびみそのもちやう」、「ゆべしのこしらへやう」、「いりざん
せうの仕やう」を記している。

以上が『家内重宝記』の内容であるが、実用的実地的とは言えるも
の、かなり高度な知識もあり、使いこなすには理解力と習熟が必要
であろう。一般町人対象とは言いながら、その範囲は上流層の人々も
含まれていることがわかる。ただし、それが生活を基礎にした日用の
実用辞書であるということには疑いを入れないであろう。

二 『昼夜重宝記』

1 『昼夜重宝記』の諸本

『昼夜重宝記』については、近世文学資料類従参考文献編15『重宝
記集二』（勉誠社昭54）に、野田千平氏によって元禄五年十一月版の
影印があり、元禄版を中心に解説がある。また同様に、『東京家政
館報』第30号にも紹介がある。

『昼夜重宝記』についても、管見の調査を最初に列挙してみることに
する。

①元禄三年版。早稲田大学図書館や長友にあるが、長友本で書誌を記してみる。

○外題 欠（早稲田大学図書館本は後補書写「元禄梓／昼夜／重宝記」）。

○目録題 「昼夜重宝記」。

○大きさ 縦七・〇 糶横一五・七 糶。

○匡郭 縦五・五 糶横一三・八 糶。

○丁数 百五十九丁（最終丁、百六十丁は欠）。

○刊記 元禄三庚午歲／五月吉日

大坂北久大郎町心齋橋

書林 平兵衛

高辻通永原屋

京都 孫兵衛

日本橋南一丁目

江戸 村上 源兵衛

②元禄五年版。東北大学図書館狩野文庫。国文学研究資料館。大妻女子大学日本文学研究室。東京家政学院大学図書館。小浜市立図書館酒井家文庫。近世文学資料類従参考文献編15所収本（野田千平氏本）。国文学研究資料館本で書誌を記してみる。

○外題 後補書写「昼夜重宝記」。東北大学図書館狩野文庫本の残存部分には「新昼（以下破損）」とある。

の残存部分には「新昼（以下破損）」とある。

○目録題 「昼夜重宝記」。

○大きさ 縦六・三 糶横一五・四 糶。

○匡郭 縦五・七 糶横一三・八 糶。

○丁数 百六十丁。

○刊記 元禄三庚午歲／五月吉日

大坂北久大郎町心齋橋

書林 平兵衛

京都 孫兵衛

日本橋南一丁目

江戸 村上 源兵衛

元禄五壬申年／十一月吉日新刻

○序末にも、「元禄五壬申十一月吉日改刻」とある。

③元禄十七年版。東京家政学院大学図書館本があり、それにより書誌を記す。

○外題 後補書写「昼夜重宝記」。

○目録題 「昼夜重宝記」。

○大きさ 縦六・八 糶横一六・〇 糶。

○匡郭 縦五・六 糶横一四・〇 糶。

○丁数 百六十丁。

○刊記 元禄三庚午歲／五月吉日

大坂北久大郎町心齋橋

書林 平兵衛

高辻通永原屋

京都 孫兵衛

日本橋南一丁目

江戸 村上 源兵衛

元禄十七甲 申曆

○序末にも、「元禄十七甲 申曆」とある。

④宝永六年版。京都大学文学部頼原文庫本があり、それにより書誌を記す。

○外題 残存部分に「新増補昼夜（以下欠損）」とある。

○目録題 「増補昼夜調法記」。

○大きさ 縦六・九糎横一五・五糎。

○匡郭 縦五・八糎横一三・八糎。

○丁数 百五十一丁。

○刊記 宝永六己年／正月吉日

大坂順慶町心齋橋

柏原屋／清右衛門

同／与市郎

江戸日本橋南壹丁目

須原屋／茂兵衛

高辻通永原屋

京都 孫兵衛

⑤正徳五年版。金沢市立図書館稼堂文庫、長友にあり、長友本で書

誌を記してみる。

○外題 欠。

○目録題 「増補昼夜調法記」。

○大きさ 縦七・二糎横一六・〇糎。

○匡郭 縦五・七糎横一三・八糎。

○丁数 百五十一丁。

○刊記 正徳四甲午／九月吉日

大坂順慶町心齋橋

柏原屋／清右衛門

同／与市郎

高辻通永原屋

京都 孫兵衛

⑥安永七年版。弘前市立図書館、東北大学図書館狩野文庫、国文学研究資料館、東京家政学院大学図書館、上田市立博物館、神戸女子大学図書館森修文庫、長友など各地にあるが、長友本で書誌を記す。

○外題 「改正増補昼夜重宝記 全」。

○目録題 「昼夜重宝記」。

○大きさ 縦一三・一糎横一八・七糎。

○匡郭 縦一〇・五糎横一五・四糎。

○丁数 百五十三丁。

○刊記 安永七戊戌九月吉日

江戸通本町三丁目

西村源六

書

同本石町十軒店

山崎金兵衛

京寺町十軒店

菊屋七郎兵衛

林

大坂心齋橋順慶町

柏原屋清右衛門

○後表紙見返し刊記の前半部分には、「医道重法記」「和漢万宝全書」「孔方図鑑」「珍錢図」の広告がある。また、別本に、本文最終丁とこの刊記の間に、「蔵板畧目録」六丁分を付載するものもある。

以上の①から⑥の諸版をまとめると次のようになる。①元禄三年版、②元禄五年版、③元禄十七年版は全く同じ系統である。④宝永六年版と⑤正徳五年版は、版權を柏原屋が手に入れて増補し、⑥安永七年版は柏原屋が美濃二ツ切本に改正増補したものである。

①元禄三年版、②元禄五年版、③元禄十七年版が同系統であることは、前出近世文学資料類参考文献編15『重宝記集二』の解説、『東京家政学院大学図書館報』第36号などで報告されているが、ここで改めて整理しておくことにしたい。

②元禄五年版には、次の序文がある。

是より先に、家内重宝記とて、世に行はるゝ懐中本有。当用節事誠に世の重宝たり。今、此書は、そのちかくして、もれたるをひろひ、益にして残れるをあつめ、昼夜調法記と名付て、世にひろむる事、しかり。

元禄五_壬申年十一月吉日改刻

この序文から明らかになることの一つは、『昼夜重宝記』は『家内重宝記』の後を受けた懐中本であること、即ち携帯の実用本であることである。第二は、刊記からも明らかであるが、「元禄五_壬申年十一月吉日新刻」とあることから、改刻版であるとされている。その内容については、三の最後に比較対照しているように、『家内重宝記』と比較してみればすぐわかることであるが、『家内重宝記』の九項目に対して、『昼夜重宝記』では十九項目に増え、それが一段と身近かな日常生活に関係する仕様書になっていることが明らかになる。

③元禄十七年版は、元禄五年版の内容と同じであるが、所々の板木の修訂は認められるにしても、今ここで問題にすることではない。但し、序末と刊記末には、それぞれ元禄十七_甲申曆と改められている。

④宝永版と⑤正徳版は柏原屋が新しく編集して、序文も改めているが、その序文末では、「増補昼夜調法記永代万宝合類無_尽」と名付けるとしている。詳しくは後述する。

⑥安永版も新しく編集して書型を変え、序文も改めているが、その序文では『昼夜重宝記』が世に久しく重宝されてきたが、板木の文字

も摩滅してきたので、訂正増補して、再び世に流布すると言っている。詳しくはこれも後述する。

2 『昼夜重宝記』諸本の内容

『昼夜重宝記』については、次の二点が明らかになった。

一点は、『昼夜重宝記』は大阪の重宝記の淵源『家内重宝記』の系列、延長線上にあるということである。即ち、『家内重宝記』の内容を補足するものであったということである。二点は、『昼夜重宝記』には三種類があること、即ち、元禄版、宝永正徳版、安永版の三種類であり、後二者は柏原屋清右衛門から刊行されて、日常生活仕様書として、一層町人たちの間で普及したことである。次にはこれら三種類の内容を概観してみよう。

元禄版については、元禄三年版を基本に、同じように版心柱記と丁数を標目にして紹介してみることにしたい。版心柱記は高さを変えて、見出しの役目を果たしているのである。

○目録（一〜五才）

○文章（五ウ〜廿二ウ）

「万手本文章尽／節用集もどき」。

目録には、諸文躰（新春、節供の祝儀の御札など）、出家・侍方、町人、百姓、普請、食物、魚・鳥・獣、絹布并紙、道具、手形請状の類別があり、「右手本数、凡百九拾有」とする。このことか

らもわかるように、往来物・簡易国語辞典の役目、手紙、手形、証文の手本を例示していることが明らかになる。

○名頭（廿二丁）

「人の名頭五姓相生文字」。

目録などから、名頭の字尽し、五性の相生、相尅の書き分けなどを記していることがわかる。

○田島（廿三才〜花檀田島三十ウ）

「耕作業の事」。

目録には「田島四季之作り物」、「五穀」、「雑穀」、「木綿」、「野菜青物」とあり、耕作や蒔植えの時節、要領を説いている。対象を農家にも広めていることが注意される。

○花檀田島（三十ウ〜花檀立花四十七ウ）

「万草花作りやう」。

目録には、「四季草花うへ作り様」とあり、春の花三十五種、夏の花八十一種、秋の花五十九種、冬の花五種、並びに蘭の作り様、雑花六種、夏の花追加二種があるほか、牡丹の植え作り様、土のこしらえ様、肥しの事などがある。

○花壇立花（四十七ウ〜神祇立花六十二ウ）

「立花指南懸論の事」。

目録には、「立花正伝」とあり、「砂の物并絵図」、「さしやう五十二ヶ条の口伝、悉く奥にしるす」と続く。

○神祇立花（六十二ウ〜名六十九才）

「神道しんどうの事」。

目録には、「神祇道しんぎだう」、「御改正服忌令ごかいせいふくきめいりう」がある。服忌令は貞享三年（一六八六）四月に民間に触れたものであるが、新旧相違の例記もついている。

○神祇名（六十九才）脈教假字七十七才

「和哥わかのかなづかひのこと」。

目録には、「定家流じやうけりうの秘意ひい」とある。和哥、和語のかなづかひを、やさしく理解する方法を説明している。

「秘ひたりといへ共、去人さくの給りし指要しじやうをしるして、こゝに書付かき」、世の中に行ない、広めるもの、と言っている。これが『昼夜重宝記』の本質で、上述してきたことと同じ類のことである。

例えば、「い、き、く、う、又、ひ、ふ、へ」のかよいを知れといい、次のように記している。

こひしい あらひ
こひしき あらふ
恋敷こひ こひしく 洗あら あらへ
こひしう あらへる
こひし あらへり

○脈教假字（七十七才）脈論藥方八十八才

「醫師いし之初学しよく脈みやく之次第しだい」。

目録には、「医道初学いだうしよく」とあり、「脈みやくの次第しだい」から「氣血きけつの虚実きよじつ」、「寒熱往来かんねつわうらい」、「脉證みやくしやうひやうせう病証びやうせうを知る事」、「四季きの平脉へいみやく」、「廿四脉にじよんみやく」

事」等十項目を立てて記している。ほかに、脉道の指南、師説、口伝を記すとある。

○脉論藥方（八十八才）藥方百四ウ

「諸家秘伝しよかひでん名方なへう之部のぶ」。

目録には、「名医諸家の秘方めいみしよかひほう」とあり、「屠蘇白散とそひやくさん（元三二用）年中の疫を除く方也」、「午黃田むわうあへん（竹田の本方）一切の氣付并諸病しよびやう」吉」など十九方を記している。単方では「虫むしくいば」、「こうひ」、「かつけ」、「うるしかぶれ」など二十四方を記している。本文にはそれらの薬種調合と薬効を記している。

○女人（百五才）女人小兒百十三才

「婦人の保養」。

目録には「婦人産前産後の養生ふしんさんぜんさんごのやうじやう」とあり、「懐胎くわいたいの有無うむを知る事」、「女子むすめを転くじて男子おとこになす法」、「安胎散あんたい（はらみの内、たいを安やすくすくすりなり）」などの薬、産前・産後の食物、禁好物のことなどを記している。

○女人小兒（百十三才）香具小兒百十六ウ

「小兒の保養」。

目録には、「小兒せうに一切いっけいの養生やうじやう」とあり、「延生第一えんせいだいいちの法」を説き、「五香湯ごかうたう（小兒の諸病、一切によし。くき、かき、たいどく）」などの薬方を記している。

○香具小兒（百十六ウ）香具美人百十八才

「万香具よろつちやくぐ之類」。

目録にも、「万香具之類」とあり、掛け香、薰き物、外郎（小田原本方）の方を示す。

○香具小児（百十八オ）美人百廿一オ）

「婦人諸のたしなみ薬」。

目録には「美人身持たしなみの方」とあり、美人の髪は落ちない薬、生える薬、長くする薬、顔を洗う薬など九条、名家の秘方を示すという。

○牛馬（百廿一オ）牛馬名酒百廿二ウ）

「牛馬の薬の事」。

目録には、「馬のくすり（五種あり）」、「牛のくすり（二種あり）」をあげ、本文ではその薬種調合、薬効を記している。

○牛馬名酒（百廿二ウ）味噌名酒百廿九オ）

「名酒の造りやう」。

目録には、「諸の名酒の造りやう」として、「豆淋酒」、「浅茅酒」など十二酒を示し、最後に「酒の多ひさますくすり」をあげている。本文では水梨がよいとし、その加工調剤方法も記している。

○味噌名酒（百廿九ウ）味噌名餅百卅三オ）

「味噌納豆の拵様」。

本文には、「御前味噌」、早作り味噌、だうご味噌、唐納豆、浜納豆などの製方を記している。

○味噌名餅（百卅三オ）名餅百三十四ウ）

「名餅の仕やう」。

目録には、「名餅の方いろく」とあり、本文には「栗もち」、「すいひもち」、「外郎餅」、「ごぼう餅」、「やきもち」の製方を記している。

○名餅（百三十四ウ）菓子百四十五オ）

「菓子の類仕やう」。

目録には、「干菓子の方いろく（十六種）」、「濟世全書菓菓子の方（本文は菓菓子の方）」、「万生菓子の置やう」などがある。

ここにいう生菓子は、栗、金柑、葡萄、梨、柚、梅などの菓物で、その貯蔵保存法を記している。

○菓子（百四十五ウ）料理百六十）

「料理献立の部」。

本文には、「十二月汁のぶん」、「雑汁のぶん」、「なますの部十二月」、「にものゝ部」、「さしみの部」、「あへものゝ部」、「あへまぜの部」、「精進すあへの部」、「吸ものゝ部」、「肴の類魚鳥精進」として、各月数品から十種近くの献立を記している。内容は『家内重宝記』と同じである。

以上が、元禄三年版『昼夜重宝記』の内容であり、それが日常生活に應用するための仕様書であることは明らかである。

それでは、その利用対象者は誰かと言えは、元禄期、大阪商工業の全盛期を迎えた大阪の商人たち、とりわけ丁稚、手代上りの新しい商人たちであった。彼等は、摂津、河内、和泉、奈良等、近在の百姓の二、三男以下の者で、大阪の奉公先に出て来、奉公先ではそれぞれの

商いに必要な教育、基本的には読み、書き、算盤は身につけさせられたものの、それ以上の教養、趣味、嗜みことは教えてもらえず、独立してからは必要に応じて、自分自身で学習し、身につけるよりほかはなかったのである。そのための独習書なのであった。

宝永・正徳版は、同じ内容であるが、これは版権が柏原屋に移ってから刊行されたものであることは前述した。ここでは正徳版の長友本によって紹介することにする。

○序文には序年なしに、次のようにある。

是より先に、昼夜重宝記とて、世に行はるゝ懐中本有。当用節事、誠に世の重宝たり。今、此書は、そのちかくして、もれたるをひろひ、益にして残れるをあつめ、増補昼夜調法記永代万宝合類無尽と名付て、世にひろむる事しかり。

○目録（一〜二丁オ。二丁ウは立花挿絵）

○立花（三オ〜二十一オ）

「立花指南（懸論の事）」。

目録には、「当流立花指南／并砂の物生花指やう口伝悉く記す」とある。

本文に挿絵を五図も入れて、読者の理解に備えているところが新味であるが、本文内容は元禄版と同じである。

○茶湯（二十一オ〜三十ノ四十ノ服忌四十二ウ）

「当流茶湯指南」。

本文には、ここでも挿絵を十図入れて説明してわたりやすい。茶湯については、宝永正徳版で初めて出したものである。

○服忌（四十二ウ〜名頭五十ウ）

「御改正服忌令」。

本文には、元禄六年十二月廿一日の触れを開板したとある。貞享版を改めたのである。

○名頭（五十ウ〜五十一ウ）

「人の名頭五姓相生」。

本文は元禄版を基本としているが、水姓で三字、木姓で二字、火姓で四字、土姓で二字、金姓で五字、それぞれ増字している。

○名頭（名頭五十一ウ〜判形五十二ウ）

「判形の五生相性」。

本文には、判形点画の図など六図をもって説明している。この項も、宝永正徳版で新出である。

○判形（五十二ウ〜相生五十四ウ）

「秘伝男女相生」。

この項も、宝永正徳版で新出である。

○香具（五十四ウ〜香具美人五十六オ）

「万香具類」。

目録には、「万香具の名方品」とあり、元禄版の野風、在明、氏郷（以上薫物）を省いて、載せている。

○香具美人（香具美人五十六オ〜印肉五十九オ）

「婦人諸の嗜薬」。

目録には、「美人嗜薬品々」とある。内容は元禄版に同じである。

○印肉（五十九オウ）

「印肉墨拵様」。

目録には、「印肉墨并朱印肉」とある。この項も、宝永正徳版で新出である。

○印肉（五十九ウ）味噌六十四ウ）

「名酒の造やう」。

元禄版を基本にするが、山川酒、醴酒、なすびいり酒の方、酒の多ひをさますくすり、などを省略している。

○味噌（六十四ウ）六十七ウ）。

「味噌納豆の拵やう」。

目録には、「味噌拵やう品」、「納豆拵やう品」と二つに分けている。この項目も元禄版を基本にしているが、だうごみその方、

きつき納豆の方、を省略している。

○名餅（六十七ウ）菓子六十九オウ）

「名餅の仕やう」。

この項目も元禄版を基本にしているが、やきもちの方、を省略している。

○菓子（六十九オウ）七十ノ八十ノ菓子牛馬八十五ウ）

「菓子類仕やう」。

目録には、「干菓子の仕やう品」とある。この項目も元禄版を

基本にしているが、求肥飴方、ほうろくせんべい、かきいりの方、薯蕷織の方、しゝらと、かせいたの方を省略している。万菓子の

置様は別項目（後述、百オウ）。

○菓子牛馬（八十五ウ）料理八十八オウ）

「牛馬の薬」。

目録には、「馬の療治」と「牛の療治」の二本だてである。馬については元禄版の内容を踏襲しているが、牛については元禄版は

一項目にすぎなかったものの、宝永正徳版では十一項目に増加している。

○料理（八十八ウ）生菓百オウ）

「当流料理献立」。

本文には、十二月汁のぶん、「雑汁のぶん」、なますのぶん、煮物のぶん、さしみのぶん、以下元禄版の内容を踏襲しているが、宝

永正徳版では、吸ものの部以下を省いている。

○生菓（百オウ）百一ウ）

「万生菓置やう」。

宝永正徳版では、栗の置き様、金柑・蜜柑・葡萄・梨・柚・柿の貯蔵保存法を記すほかは、元禄版を省略している。

○生菓（百一ウ）病論百七ウ）

「診脉之論」

本文は、「脉をとる次第」、「四季の平脉」などで、元禄版の記事

によっているものの、全て一致はしない。

○病論(百七ウ)薬方百二十三才)

「諸病論附脉」。

目録には、「道三医道初字」とある。本文には、「中風」、「傷寒」、「中寒」、「中暑」、「中湿」、「火症」、「虐疾」など三十一症の記述がある。

後年の『道三丸散重宝記』(天明元年)の編成とも異なる。

○薬方(百二十三才)婦人百四十八ウ)

「諸薬附加減方」。

本文には、「八味順気散」、「木香流気飲」、「驅風湯」、「小統命湯」、「四君子湯」、「四物湯」など八十六種の薬方を記している。

○婦人(百四十八ウ)百五十六ウ)

「婦人科」

目録には、「婦人科并二産後産前」とある。元禄版との関係は認められず、本文には「産前」、「懐胎のうち食物好」、「日によりあしき方」、「催生薬」、「産後」などの項目がある。

○婦人(百五十六ウ)雑方百六十二才)

「小兒科」。

目録には、「小兒一切の養生并二薬方」とある。本文には、「小兒脉の次第」、「小兒病を見る次第」があり、次に元禄版の「小兒の保養」と同じ内容を載せている。

○雑方(百六十二ウ)百七十一ウ)

「諸家秘伝名方」。

目録は、「秘伝名方丸散品」と「名方膏薬品」の二本だてである。本文は、元禄版の「諸家秘伝名方部」から大略を採録しているが、「タバコ膏」など新しい項目もある。「酒のゑびをさますくすり」は、元禄版の「名酒」の項に出ていたものである。

以上のように、宝永正徳版は多くは元禄版によっている所が多いが、新味も出している。項目の取捨選択、内容の増減など、新しい社会への対応と言わべきであろう。

安永版について、内容を同じように紹介することにする。安永版は版權が柏原屋に移って、版型を美濃二ツ切本、横中本仕立てにして、見易くしたものであることは前述した。

○序文は、序年なしに、次のようにある。

昼夜重宝記、世に行る事尚し、其書たるや、行住座臥、切要の事を遍くのせて、実二人間昼夜の重宝なり。今や星霜おしうつりて、文字磨滅す。依而、悉く訂正を加へ、且泄たるを補ひ、ふたゝび世に弘むる事、しかり。

浪花書林 堂板

この序文からもわかるように、『昼夜重宝記』が流行し、内容を改めて新版にしたことが明らかになる。

同じように内容を紹介することにするが、本書は版心柱題は「昼夜重宝記」のみなので、目録と対照しながら本文内容を見ていくことに

する。

- 目録 (目一〜目二)
 - 手形証文請状の類 (一オ〜三オ)
銀子手形、奉公人・借屋・寺受・家屋敷買請状、また男・女養子一札が雛形として示されている。元禄版の三例より、はるかに具体的である。
 - 手形式法并書法 (三オ〜四オ)
料紙、書法、押印、文言、書体、畳み方などを、その理由とともに説明している。
 - 十干并十二支 (四オ)
 - 銭払相場割付之事 (四ウ五オ)
 - 四季の異名 (五オ五ウ)
 - 篇冠杳構尽 (五ウ六オ)
 - 片仮名イロハ (六オ)
 - 六十の図 (六ウ)
- 右の六項目は新出の項目である。
- 人の名頭字 (六ウ)
水性十五字、木性二十二字、火性二十九字、土性十六字、金性二十九字であるが、宝永正徳版にはほぼ同じにしても、若干の文字の入れ替えに注意すべきであろう。人名文字の時代による流行変化と考えられる。
 - 書判并五性相性 (七オ八オ)
- 男女相性 (七ウ)
宝永正徳版が一層図表化され、一目瞭然に記されている。
 - 四季草花作様 (八オ〜二十三オ)
本文の内容は元禄版に同じである。
 - 当流立花指南 (二十三オ〜卅ノ四ウ〜四十九オ)
本文の内容は元禄版、宝永正徳版に同じである。宝永正徳版の挿絵とは意匠を異にする所があり、わかりやすくなっている。
 - 当流茶湯指南 (四十九オ〜五十八オ)
本文には、「御茶立やうの事」とある。宝永正徳版に内容・挿絵ともに同じであるが、挿絵についてはより具体的に上品に描かれている。
 - 生花なげ入の事 (五十八ウ〜五十九オ)
 - かけ花生の事 (五十九ウ〜六十ウ)
本文には、ともに挿絵が色々ある。新出の項目である。
 - 印肉墨拵やう (六十ウ〜六十一オ)
内容は、宝永正徳版に同じである。
 - 万香具の名方 (六十一オ〜六十二オ)
目録には、「懸香の方種」とある。本文には、元禄版の薫物まてを出している。
 - 婦人嗜名方 (六十二オ〜六十四ウ)
目録には、「婦人嗜菓名方」とあり、本文の内容は、宝永正徳版「婦人諸の嗜菓」と同じである。

染料 (80才〜86ウ)	神祇 (含服忌令) (62ウ〜69才)		錢払相場 (4ウ〜5才)
	田畠 (23才〜30ウ)		手形式法 (3才〜4ウ)
			手形証文 (1才〜3才)
		茶湯 (21才〜42ウ)	茶湯 (49才〜58才)
			道三医学 (105〜114ウ)
	名頭 (22)	名頭 (50ウ〜51ウ)	名頭 (6ウ〜7才)
	女人 (105才〜113才)		男女相性 (7ウ)
		判形 (51ウ〜54ウ)	秘伝名方 (157ウ〜163ウ)
服忌 (3才〜9才)	服忌 (神祇) (62ウ〜69才)	服忌 (42ウ〜50ウ)	服忌 (181才〜189才)
八卦 (9ウ〜40ウ)	美人 (118才〜121才)	美人 (56才〜59才)	婦人嗜 (62才〜64ウ)
八算 (87才〜94ウ)	文章 (5ウ〜21ウ)		婦人 (女人) (146才〜148才)
		婦人 (148ウ〜156ウ)	婦人 (産前産後) (148才〜155才)
宝曆 (40ウ〜54才)		病論 (107ウ〜123才)	篇冠香構 (5ウ〜6才)
妙薬 (68才〜79ウ)	味噌 (129ウ〜133才)	味噌 (64ウ〜67ウ)	味噌納豆 (69ウ〜73才)
日本 (95才〜122才)	脉論 (77才〜88才)	脉論 (101ウ〜107ウ)	
	名酒 (122ウ〜129才)	名酒 (59ウ〜64才)	名酒 (65才〜69ウ)
	名餅 (133才〜134ウ)	名餅 (67ウ〜69才)	名餅 (73才〜76才)
	薬方 (88才〜104ウ)	薬方 (123才〜148ウ)	薬方 (116才〜146才)
	立花 (47ウ〜62ウ)	立花 (3才〜21才)	立花 (23才〜49才)
料理 (122ウ〜138終)	料理 (145ウ〜160)	料理 (88ウ〜100ウ)	料理 (80才〜102才)

※項目は原則五十首配列
六十函 (6才)

- ほうる」、「求肥」、「同方」、
「薯蕷織」、「しゝらど」、「ち
どりの方」だけが記されている。
○万葉の置やう (七十六ウ〜
八十才)
元禄版の内容に同じである。
○料理献立色 (八十才〜百二
ウ)
内容は、「十二月汁のぶん」、
「雑汁のぶん」、「なますの部
十二月月」、「煮ものゝ部」、
「さしみの部」、「あへものゝ
部」、「あへませの部」など、
元禄版に同じである。但し、
献立には増減がある。
○精進すあへの部 (百二ウ〜百
三才)
○吸物の部 (百三才〜百四才)
○肴の類魚鳥しやうじん (百四
才〜百五ウ)
目録には、右三項目を、精進

の料理、とする。内容は、元禄版、宝永正徳版の「料理」を独立項目にしたものである。

○道三の医道初学（百五ウ〜百十四ウ）

本文は、元禄版の、「医師の初学の次第」に同じである。

○七表陽脉の事（百十四ウ〜百十六オ）

本文は、元禄版に同じである。

○諸薬附加減方（百十六オ〜百廿ノ四十〜百四十六オ）

目録には、「薬方加減之方」とある。本文は、宝永正徳版に同じである。

○婦人の療治并二産前産後（百四十六オ〜百四十八オ）

本文は、内容の一部が元禄版に共通する所もあるが、新出である。

○産前産後（百四十八オ〜百五十五オ）

目録には、「産前産後の保養」とある。本文は、元禄版の「婦人の保養」にはほぼ同じである。

○小児の保養（百五十五オ〜百五十七ウ）

本文は、元禄版にはほぼ同じである。『道三の医道初学』以下この辺の記述は『医道重宝記』を参照するように案内していることが注意されることになる。

注意されることになる。

○秘伝名方丸散（百五十七ウ〜百六十三ウ）

本文は、元禄版「諸家秘伝名方の部」に同じである。

○雑方妙方并膏薬（百六十三ウ〜百六十六ウ）

本文は、元禄版の「雑方」の「万病無憂膏」までに同じである。

○食物能毒の事（百六十六ウ〜百七十四ウ）

本文の内容は新出であるが、類同の記述は『昼夜重宝記』にもある。

○灸をする時むかひよき方（百七十四ウ、百七十五ウ〜百八十一オ）

目録には、「灸をする時善悪の事」とある。本文の内容は新出であるが、既に『鍼灸重宝記』（享保三年初版）がある。

○御改服忌令（百八十一オ〜百八十四ノ七〜百八十九オ）

目録には、「御改服忌令并追加」とあり、本文は元禄版に同じで、貞享三年の触を出している。

○潮汐のみちひ（百八十九オ）

本文は、新出である。

○牛馬の薬の事（百八十九ウ〜百九十一終）

本文は、牛・馬とも、宝永正徳版に同じである。

安永版は、見てきたように、元禄版、宝永正徳版を基本にしているのであるが、新出項目も十項目近くある。元禄版と宝永正徳版の使用では、詳しい記述は元禄版に戻ったようであり、新出項目については、より日常的、実用的な知識が記されたと言わなければならない。

『家内重宝記』、『昼夜重宝記』の元禄版、宝永正徳版、安永版の項目を、ほぼ五十音順に配列して、比較対照してみると別表の通りになる。これらの項目が、大阪町人、あるいは江戸時代の一般庶民が身につけるべき知識、教養項目であったと理解してよいであろう。

三 『昼夜重宝記』の広告宣伝

『昼夜重宝記』が柏原屋清右衛門版になってからは、柏原屋の蔵版目録によって、しきりに広告されており、よく売れたと推測される。

『近世出版広告集成』（ゆまに 一九八三）は、その原広告掲載書が明らかにならないこと、即ち年代の不明なのが難点ではあるものの、それによって広告宣伝の実情を見てみたい。

第一巻 330頁

○昼夜重宝記 懷中本 立花、茶湯、服忌令、香具類、料理の仕様、脉論、療治、藥方、牛馬療治、其外いろく重宝成事を入

同じく348頁には、内容を変えて次のようにある。

○昼夜重宝記 一冊 手形証文の認めやう、四季草花作りやう、立花

并ニ生花、茶湯指南、香きくやう、婦人たしなみ藥、名酒、味噌、もち、その外食物めつらしきこしらへやう、料理こん立、

医道、療治方、食物能どく、牛馬のりやうぢ、其ほか、日入用の重ほうを、あまた集む。（安永七年版一本『昼夜重宝記』、

『医道重宝記』。

同じく353頁の次の広告（次頁）は詳細である。細目を上段から下段へ、順に翻字してみる。

一万手形証文案文并ニ法式認やう、委く致し、又錢相場割方等、

委細にしるす。

一草木作やう、立花指南、生花投入、茶湯等の伝授、又は図式を記し、師なく、出来易き事を多く集む。

一名酒、名味噌、名餅、名菓子の類、奇妙の拵へやう并むし菓子類、いろく悉く口伝を頭はし、甚心やすく出来候やう、委しく記す。

一四季料理、魚類、精進等、両方共、当世珍敷献立、十二月三分け、見安くいたし、数多集む。

一栗、梨子、其外菓物類、一切貯様を記す。又は食物喰合せ、其能毒を微細に記せり。

一万病の療治、脉の取やう、藥方分量加減の法、婦人の療治、さん前さんこの養生、又は小児の養やう、児を給人、平生心得に成事を出す。外ニ小児重法記、医道重法記、日用済民記、何れも

ひらかな療治本、民家常ニ養生の心得ニ成る書也。

一秘伝名方、丸散妙藥、かうやく等、品拵やう、多く集め、又は牛馬の療治□そん等、委敷記す。

右の外、四季の異名、人の名頭字大寄、書判或は男女相生、朱墨印肉拵やう、其外種々、昼夜ニ可用入用の事共、不余集、人家ニ置、大に便利なる重法の書なり。

右の本、御入用の節は、御手寄の書林にて、御求め可被下候。

板元大坂 心さいばし順慶町北へ入 柏原屋清右衛門

民家 萬寶 増補晝夜重寶記

全一冊

一 萬子形建之案又并法武徳中重くは
又後お場割方爲委細よ志内と

一 茶本 びうま死物おは茶湯おの他操
緊式と記一師ち 葉葉易きのそ多く集む

一 名酒名味 嗜名餅名菓子のおおと如くの梅
やう并し一菓子教のうく一香く口傳と死
へ一其心やとく出まのや一委一く記と

一 巨季料 巨魚於精進を東方在尚世法於
秋三二月にかけ見安く心に一教多集む

一 粟初中其外菓物 煎切抄換と死とよの食
物喰合其其独毒を緻細よ記せり

一 万病の療治 肺の毒を葉方付分量加減の
法婦人の療治さん若んどの養生又小児の
本中一思と持人平生を以て成るを物外
小児重法記 醫乃重法記 日用海民記 河止
らるる療治本 医乃重法記 養生の法に成る書

一 秘傳名方 九教如系かや未也 梅中多
集め又半馬の療治を せんを委委記と

右の如く季の夏名人の名記文字書と刺或男女程
朱書雲予肉梅中其外種一産後之刺入用母
左の如く集令多也方一便刺なる書法の書たり

右の本内用は名は法を考の取梅と成求めると
板元大板 心は法を考の取梅と成求めると
柏原重徳在門

左の本内用は名は法を考の取梅と成求めると
板元大板 心は法を考の取梅と成求めると
柏原重徳在門

同じく354頁には次のようにある。

万手形証文案文并 錢相場割方、其外諸芸能、療
 懷中本 治、薬方、能毒、男女相生等、誠に師なくして、
 増補昼夜重宝記 早速に、すみやかにて記、人家に置いて、昼夜に
 全一冊 用ゆべき入用事とも残らず集め、大に便利なる
 重宝之書也。

同じく358頁には次のようにある。

ちやてうほうき
 昼夜重宝記 すべてまい日／＼入用の
 重宝、のこらずあつむ 一冊

右のように、広告の文章はそれぞれに違うのであるが、内容の紹介は別にして、読者へ勧める要点を記せば次のようになるであろう。

日々入り用の重宝のこと、それには色々の口伝、秘伝、名方もたくさん集め、詳しく微細に記し、図式も加え、見やすく理解しやすく顕して、師匠もなしに独習することが出来、人家に置いて大いに便利な本、それが『昼夜重宝記』ということになるであろう。

重宝記について調査を進めているが、『家内重宝記』に始まり、それを受けて『昼夜重宝記』が出来たように、種々色々の重宝記が誕生している。そこには、日常生活に必要な総合的な重宝記があり、一方では独立した特定領域・分野の重宝記もある。作られた時代も、江戸

時代はもとより、明治、大正、昭和前期にかけて、刊行され続けていて、私の調査では二百点を優に超えている。いずれ、その調査は近い時期に発表するつもりであるが、書名だけで実物を確認していないものもあり、完璧は期しがたいと残念に思っている。

大方の御教示を仰ぎたい。

調査にあたっては、本文に記した図書館等のほかにも多くの機関で御世話になった。また、個人的にも多くの方々に御教示を受けているが、石川了氏には常に御助力を受けている。

各位に深甚の御礼を申し上げます。